

【共存モデル地区（黒尊川流域）の活動総括】

黒尊川流域では、平成18年11月19日に流域の住民組織「黒尊むら」と四万十市、高知県の三者にて「黒尊川流域の人と自然が共生する地域づくり協定」を5カ年の協定期間として締結した。黒尊むらでは、5カ年協定期間の満了後、協定内容を一部変更し、市と県との再協定を望んでいる。

再協定をする前に、協定期間中の活動総括を行った。活動を通じて「目標とする姿」にどれだけ近づけたかを以下活動の総括をすることとする。

（1）川はアユやアイキリ、アメゴなどの川魚が豊富に棲むことができる清流であること（清流環境についての活動総括）

黒尊むらと県は、協働で黒尊川の定期的に水質調査（年に4回）を行っている。調査項目は、四万十川条例における清流度、水生生物、窒素、リン、他に国の環境基準項目であるPH、SS、BOD、DO、大腸菌群数を実施してきた。

水質調査については、国の環境基準項目は数値を満足しており、四万十川独自の水質基準である清流基準では、水生生物、窒素、リンは基準を満足しているが、清流度については、箇所により年々基準を下回る箇所が増えてきている。

また、四万十市は生活排水対策として、新規に合併浄化槽を整備（計5基）。県の補助事業等で、河川内へ不法投棄されたゴミの回収（計2回）を実施した。

ただし、地元からは以前に比べて水量が減り淵に砂利が入ってきたという意見が多く、その他アユやアイキリは少なくなったという意見や、災害等の河川工事で自然護岸から人工護岸になって、水の流れが変わったという意見も聞かれた。

2）水辺は、四季折々の植物が豊富に生育する環境であること（水辺環境についての活動総括）

黒尊むらは、県の森林環境税に係る補助金を利用して、河畔林の間伐と川に下りるための遊歩道を数か所整備した。当初道路から川も見えず、旅行者も立ち止まらなかったが、間伐をし、遊歩道と看板設置をしてから、川がよく見えるようになり、旅行者も興味をもってくれるようになりとても良くなったという意見が多い。ただ、草刈り等の維持管理が大変だという意見もあった。

また、水辺の植物の生育については、キシツツジ、シャシャブ、柳、ササユリ、オニユリ、彼岸花が少なくなったという意見があった。

3) 里は、伝統的な風景であるゆず畑や棚田、石積み、森林軌道跡などが残っていること

(里の保全についての活動総括)

田は少なくなったが、ゆず畑は増えた印象。棚田は残っており、また、森林軌道跡は、石積みや基礎が残っている。全般にそんなに大きな変化はない。

しかし、石積みなどは豪雨で壊れた後、手入れができない、鳥獣被害が多く田畑を保つのが難しいという意見があった。

4) 森は、足元まで日が入り、歩いてたのしむことができること

(森の保全についての活動総括)

黒尊むらでは、森林環境税を使った森林の間伐を実施した。2) の総括にもある河畔林の間伐もいっしょに行い、遊歩道や看板設置は外部からの旅行者には喜ばれよかったという意見が多い。

県による間伐、作業道設置の実績は、間伐 250ha (切捨間伐：134ha、除伐：16ha、搬出間伐：100ha)、作業道延長 18km であった。

また、八面山の原生森や三本杭のブナ林は最高だという意見があった。

5) 暮らしは、伝統的な文化、料理や歴史などが伝わるとともに、環境にやさしい取り組みが行われ、住民がイキイキしている。

(伝統文化・歴史等についての活動総括)

黒尊むらは、文化・歴史の面でいえば、お菊伝説の伝承のため、紙芝居の制作と発表を行った。地元料理については、しゃえんじりが提供しているが、黒尊まつりでも地区ごとの料理を実演販売した。

外部との交流面では、TOTO 基金を利用して、地元の口屋内小と宿毛市栄喜小との交流会 (エコクラブ交流会) を実施。また、柚子摘み体験、茶摘み体験、玖木地区の橋めぐりツアー、年に一回の黒尊まつりの開催などイベントによる交流活動は活発であった。

また、黒尊流域の自然をゆっくり宿泊して楽しんでもらうため、農家民宿「四万十くろそん宿街道」を開始。現在 5 軒の宿で宿泊可能であり、滞在型の外部交流にも取り組んでいる。

その他、黒尊の案内看板の設置や黒尊通信の発行、HP 等により、地域の内外の人々に黒尊の魅力の PR を行い、これらの活動を通じて、全般的に黒尊の知名度が上がったという印象がある。

イベント活動をすることで、普段外に出てこない人も出てきていっしょに活動できるのはよいことであり、活動を通じて笑いが出来るのが一番大事だという意見があった。

また、協定締結以降、四万十くろそん会議等を通じて、各地区で集まれる場ができ、地域の伝統文化を次の世代に引き継ぐ場ができたことは大きいという意見もあった。